

シニアライフ



広がる仲間の輪

淳さんが手掛けた家に住む移住者の輪も広がっている。椿正光さん(65)、勢津子さん(59)夫妻は、3月に神奈川県横須賀市から来たばかり。「良い眺め。水も空気もおいしくて、毎日が楽しい」と声を弾ませる。

土地探しや資金繰りで断念しかかったが、淳さんと出会い、「同世代で気が合い、話がどんどん進んだ」と正光さん。勢津子さんは「後はぜいたくをせず、心豊かに暮らしたい」と話す。

加茂康一さん(76)、早苗さん(69)夫妻は都内から移って1年余り。当初は高齢を理由に周囲から反対されたが「今ではいろんな人が泊まりにくる」と笑う。

「ついのおすみかにするなら、先のことを考えた場所選びを」と康一さん。家はJR小淵沢駅から徒歩17分。運転はせず、食品は宅配だ。車が必要な時は友人が来てくれる。隣町の総合病院や訪問介護のサービスも調べ済み。二人は「もう都会に帰る気はない」と話した。

一級建築士の淳さんは、設計だけでなく、施工までを手掛ける。亜希子さんは宅地建物取引主任者の資格を持ち、同じ移住者の立場から土地探しや生活の相談にも乗る。

依頼主は五十代後半から六

建築中の現場に足を運ぶ宮川淳さんと亜希子さん夫妻。山梨県北杜市で。

● 移住者のための家造り



心豊かに田舎暮らし

十代が中心で、多額のローンは組みにくい世代。そこで、注文住宅ではなく複数のプランから選んでもらうことで、

土地と建物を合わせて一千万円台で手に入るように価格を設定した。無垢材を使った木造平屋の

「大きすぎない家」が基本で、造りもシンプル。淳さんも地元の大工仲間らと現場に立つことで「時間はかかるが、コストを抑え、良質な家を提案できる」。

丁寧な仕事と人柄が評判を呼び、依頼は後を絶たない。

「でも、ここで仕事ができるとは思わなかったんですよ」と淳さん。十年前、横浜市に事務所を構えながら、住まいだけを小淵沢に借りた。前妻の病氣療養のためだったが、移住後まもなく他界。

「五年ほどは落ち込んで、体調も崩していました」と言う。男の独り暮らしに、近所の人は何かと気遣ってくれた。

「山菜を採りに行くらう、イノシシ鍋を作ったから」と誘ってくれて。みんなの支えがなければ、立ち直れなかった。横浜に帰った際、外車ディーラーへ寄り、偶然担当になった亜希子さんと出会う。

「当時は亡くなった奥さんの写真を持ち歩いてた。大切にしていたその姿が、すてきだと思った」。亜希子さんも長男(む)を連れて小淵沢へ。ガーデンハウスを設立し、二〇〇九年に結婚した。

「移住を目指す人に、できる限りのことをしたい」。移住者と地元の人とを積極的につなぎ、ブログなどで情報も発信する。忙しい日々を送る夫婦の夢は、自分たちの新居を建てること。「小さな音楽ホールも造って、自宅で結婚式をしたいんです」

(発知恵理子)